光心寺だより

No. 26
令和元年 6月
2019年6月1日発行

令和元年度（平成31年度）
報恩講 日程

仏事あれこれ　住職さん教えて！
テーマ：浄土真宗のタブー その④

時々刻々「心の綺麗な人は、他の人々の心をも綺麗にする」

令和元年度（平成31年度）十勝山 光心寺
宗祖親鸞聖人 報恩講（ほうおんこう） 日程

6月27日（木曜日）

※1日目は午後からの法要となります

午後

13:30 大逮夜（おおたいや）法要　ご法話二席

15:30 朗読説法　チーム一番星
「しあわせのたねはここにある」

「がばいばあちゃん」の最新版です！

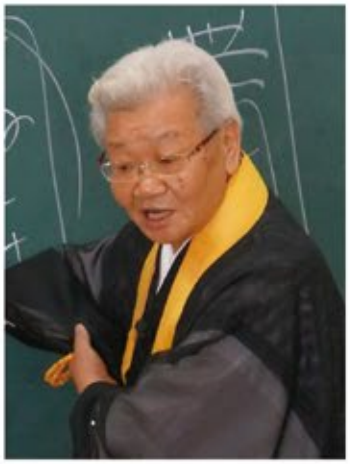
17:00 お斎（とき）　光心寺食堂
㊟こうしん亭　開店

18:00 初夜（しょや）法要　ご法話一席
灯火の集い

19:30頃 終了

ご講師

兵庫県神戸市 高松寺 住職
谷川（たにかわ） 弘顕（ひろあき） 師



【谷川弘顕師プロフィール】
ご本山の伝道院（法話・説教を専門的に学ぶ機関）において、布教使の育成に長年携わった先生で、いわば「布教使の先生」です。この度も心にしみいる、素晴らしいご法話がいただけると思います。多くの皆さまにご聴聞いただきたく、あらためてご案内いたします。

6月28日（金曜日）

午前

8:00 晨朝（おあさじ）法要　ご法話一席

10:00 満日中（ごまんざ）法要　ご法話二席

12:30 お斎（とき）

午後

13:30 特別講座　担当 光心寺住職

「日ごろ聞けない仏事の常識」

14:00頃 報恩講 お楽しみ抽選会

14:30頃 終了

朗読説法 チーム一番星

普段の「お説教」とは趣向を変え、朗読劇のスタイルで、み仏の教えを伝える新しい〝説法〟です。舞台スクリーンにスライド映像を流し、スポットライトの中、実話を基にした朗読と法話・歌を通して、み教えのエッセンスを伝えていきます。

全国に引っ張りだこの「チームいちばん星」による、笑いあり、感動あり、ご法義ありの朗読劇。当寺では6度目の上演となります。

秋季永代経法要

平成30年11月26日・27日

秋季永代経法要には、上川南組・専証寺ご住職・打本厚史師にご出向いただきました。ブタの背中にまたがった人が、豚の顔の前にエサをぶらさげると、ブタはそれが欲しくて必死に前に進む。でもとどかないからさらに進み続ける。そしてそのまま市場まで行ってしまい、売られて肉となってしまった……。私たちの人生も同様ではないでしょうか？「今欲しい！」そして「損だ」「得だ」「勝った」「負けた」をエネルギーにして生きてる。それはいかがなものかと、頭では分かっているが、やめられないのが私たち。そしてそれをそのまま包み込むのが仏法の世界であり、仏法を聞いたら聞く前には戻らないし、聞かなければよかった、ということにもならない。皆さん、意識して仏法に出会い、私の事実を知らせていただきましょう。このようにお取り次ぎいただきました。

除夜会・元旦会

平成30年12月31日・平成31年1月1日

除夜には、この1年を振り返って感謝の気持ちをあらわし、除夜の鐘をつきます。当寺では、毎年12月31日の午後11時30分からご参詣の皆さんお一人おひとりに鐘をついていただいております。

平成最後の大晦日が終わり、新年を迎えたのち、参詣の皆さまと元旦のお勤めをいたしました。元旦会は「元旦の法要」という意味で、新年を祝うと同時に今年もお念仏とともに日々を送らせていただく誓いを新たにする、お正月のすがすがしい行事です。

「一年の計は元旦にあり」といいますが、浄土真宗の門徒にとって元旦は、真実に生かされる身の幸せを喜び、この一年をお念仏のみ教えをよりどころに送る決意を新たにする日。

元旦の朝には、家族揃って家の仏壇に灯りを点じ、打敷をかけ、鏡餅をお供えし、花は松を中心に生花を配していけます。仏さまに年頭のお参りをして新年を新たに迎えたいものです。

元旦会の後、今年も新春抽選会でお楽しみいただきました。

「除夜の鐘」はどなたでも撞くことができます。今年の大晦日は、皆さまお誘い合わせの上お詣り下さい。お待ちしております。

御正忌報恩講・仏教婦人会報恩講・新年会

平成31年1月21日

御正忌報恩講は、親鸞聖人の祥月命日(新暦の一月十六日)に、聖人を偲んでお勤めする法要です。ご本山・西本願寺では一月十六日を最終日・御満座として八日間報恩講がお勤まりになっています。

今年は、安芸教区広陵東組・西應寺副住職・平慈敬師にご出向・お取り次ぎいただき、聖人のご遺徳をともに偲ばせていただきました。午後には恒例の新年会が行われ、今年も住職・坊守が考案したクイズで大いに盛り上がりました。決して難しくはないですが、頭のトレーニングにはなるかも?

来年は皆さんも是非参加して下さいね。

仏教婦人会・親光会 会員物故者追悼法要・合同研修会

平成31年2月21日

今年より2月21日の常例法座を、婦人会(和光会を含む)と親光会の合同追悼法要および研修会としてお勤めすることになりました。

はじめに、各会物故会員の追悼法要をおこない、会の発展に寄与いただいた功績をたたえ、哀悼の意を表しました。

続いて研修会となり、この度は北豊教区京仲組・正山寺ご住職・生土昌行師にご出向いただき、「自然について」という講題でお取り次ぎいただきました。親鸞聖人が「自然(じねん)」という言葉を用いられるとき、たんに現代の私たちが自然(しねん)と読む、読み方のちがいだけではなく、「自」は「阿弥陀さまの方から」、「然」は「私を仏にさせる」という意味がある(阿弥陀さま → 私)ことをお話し下さいました。他教・他宗においては、私の方から(神仏に)祈る(神・仏 → 私)ことを説いているので、まったく矢印の方向性が逆なのです。しかも阿弥陀さまは、救いの対象となる相手を選ぶこともなく、条件もつけません。阿弥陀さまの救いは、「誓願」にもとづくものですが、「誓」は、私たちを仏になるよう育てます!、「願」は育って欲しい!、というように、私たちを摂取する深いお慈悲のこころが「誓願」であり、それが「南無阿弥陀仏」と、目で見え耳で聞こえるようにはたらいてくださっていることを聞いていくのが、浄土真宗のみ教えであるとお示しくださいました。

午後からは、茶話会のように京菓子・お茶をいただきながら、気軽に受講する時間といたしました。住職が講師になり、「仏教におけるお墓」の起源から今日にいたるまでの歴史的変遷を、スライドで写真を見ながらともに学びました。事情があることとはいえ、墓じまいや合葬が「ブーム」のようになっている昨今の日本ですが、長い歴史に育まれ培われてきた人間の営みについては、もう少しじっくりと学び熟考することも必要かと思います。

春季彼岸会・永代経法要

1日目　平成31年3月21日

永代経法要とは、いのちを恵まれた私たちが、この法要をご縁として、仏恩報謝の心を表す営みであり、亡くなられた方をご縁として、故人を偲びながら永代（末永く）に経を読み続けていく、つまり「尊いみ教えが末永く伝わっていくように」という願いを持って勤められる法要です。それは同時に「子や孫や曾孫の代にわたってみ教えを聞き喜ぶこと」を願って勤める法要ということでもあります。

春の彼岸会・永代経法要の初日には、東北教区相馬組・勝縁寺衆徒・齋藤断城師にご出向いただきました。当院には2度目のご縁でありました。師のお話は、お念仏の救い、み教えのことはもちろん、荘厳の仕方や作法についても、その由来まで示される幅広いもので、参詣ご門徒の皆さんも深い興味関心をもって聴聞された方が多かったようです。

2日目　平成31年3月22日

春の彼岸会・永代経法要二日目は、新得町・新泉寺ご住職・高久教仁師にご出向いただきお取り次ぎをたまわりました。師は学生時代から、書道の研鑽を通して漢字についての知識を深め、中国で成立した漢字は、どのようにして出来上がってきたかなど、漢字のルーツやその意味について精通しています。仏教がインドから中国を経て日本に伝わった過程で、わが国の仏教の教えが中国成立の文字・漢字の影響を大きく受けたてきたことを鑑みるとき、そこから、人間のあるべき姿を学び取るという視点は、教えられることがまことに多いことを学びました。ご門徒のなかには、「初めて聞いたことが多く、大変勉強になった。お経も漢字で書かれている。一つひとつの文字に、そのような深い意味があるとは奥が深い。また続きを聞いてみたい」という感想もありました。

はなまつり

今年も春季彼岸会の折に、お釈迦様の誕生をお祝いする「はなまつり」を行いました。 誕生仏に甘茶をかけ、お参りした後、皆で甘茶をいただきました。

御正忌報恩講・仏教婦人会報恩講・新年会

平成31年1月21日

今年も1月21日に新年会を行いました。食事の後、恒例のビンゴ大会、スクリーンを使った3択クイズ、「総代さん、お絵かきですよ!」、そしてシルバー川柳クイズで大いに盛り上がりました。ぜひ皆さんもこのシルバー川柳クイズに挑戦してみてください。

3択クイズ

シルバー川柳

住職さん！総代さん！お絵かきですよ！

シルバー川柳

（　）内に入る言葉を　枠内の言葉から選んでください。

1　（　　）と噂をされて散歩止め
2　（　　）書かねばあの世とうわさされ
3　どこで見る（　　）天か地か
4　朝起きて調子いいから（　　）に行く
5　万歩計半分以上（　　）
6　私だけ（　　）がいると妻嘆く
7　こんにちは思い出せずに（　　）
8　（　　）読めない書けない聞きとれない
9　（　　）術後びっくりシミとシワ
10　この（　　）昔は恋で今病

医者　東京五輪　白内障　伴侶　さようなら　年賀状　徘徊　ひ孫の名　動悸　探しもの

★答えは12ページ

歎異抄（たんにしょう）に聞く

第二十五回

第十七章

今回は、「辺地往生」とはいかなることをいうのかを説き示す第十七章を解説いたします。

桃井信之

〈第十六章　本文〉

一　辺地往生をとぐるひと、つひには地獄におつべしといふこと。この条、なにの証文にみえ候ふぞや。学生だつるひとのなかに、いひいださるることにて候ふなるこそ、あさましく候へ。経論・正教をば、いかやうにみなされて候ふらん。

信心かけたる行者は、本願を疑ふにより て、辺地に生じて疑の罪をつぐのひてのち、報土のさとりをひらくとこそ、うけたまはり候へ。信心の行者すくなきゆゑに、化土におほくすすめいれられ候ふを、つひにむなしくなるべしと候ふなるこそ、如来に虚妄を申しつけまゐらせられ候ふなれ。

〈現代語訳〉

一　真実の浄土に往生することができず、そこから遠く離れた辺地の浄土（方便化土）に往生する人は、最終的には地獄に堕ちるであろう、ということについて。このような主張は、いったいどの経典や論書に証拠となる文章があるというのであろうか。

これが学者たることを誇示する人たちの中から言い出されたことと聞いているが、あきれるほど情けないことである。経論やその注釈書である聖教を、どのようなものとお考えになっていらっしゃるのだろうか。

真実の信心がいまだ欠けている念仏行者は、阿弥陀如来の本願を疑うことによって、浄土の片ほとりの辺地に往生して、そこで本願を疑った罪をつぐなった後に、真実の浄土（報土）に往生して悟りをひらき仏と成るのだ、と聞かせていただいている。

真実の信心をいただいて念仏する者は少ないので、阿弥陀如来は方便化土に多くの者を勧めて往生させておられるのである。それなのに、化土往生の者は終極には地獄に堕してしまい、化土への往生が無駄になってしまうだろう、と主張することは、釈迦如来がうそ偽りをおっしゃったと言っていることになる（のがわからないのであろうか）。

◆辺地往生とは？◆

この章では、「辺地往生」に関する異義を取り上げて批判されています。

辺地とは、少し詳しくいうと「辺地懈慢・疑城胎宮」などと表現されるもので、如来の智慧（仏智）を疑い、真実信心なき者のために仏が仮に建立した方便の浄土のことです。これを「化土」ともいいます。阿弥陀仏の本願を信じ切れない自力諸善・自力念仏の行者が往生する世界とされています。如何なる衆生をも救うとの阿弥陀如来の誓いを成就するために建てられた方便誘引の願（第十九願・第二十願）にもとづく世界で、究極的には真実報土に導き入れるために説かれている世界です。

親鸞聖人は、主著『教行証文類』の第六・「化身土巻」の冒頭に

顕浄土方便化身土文類

つつしんで化身土を顕さば、仏は『無量寿仏観経』の説のごとし、真身観の仏これなり。土は『観経』の浄土これなり。また『菩薩処胎経』等の説のごとし、すなはち懈慢界これなり。また『大無量寿経』の説のごとし、すなはち疑城胎宮これなり

と記されています。また『愚禿鈔』にも

「弥陀の化土について二種あり。一には疑城胎宮、二には懈慢辺地なり」

とお示しになっています。

この「辺地懈慢・疑城胎宮」について説明すると

- **辺地**……浄土の片隅。真実報土ではなく方便化土。
- **疑城**……『菩薩処胎経』に説かれる世界。快的で楽しい世界のため、浄土願生者は怠惰の心を起こし、ここに満足して真の浄土を願わない。
- **辺地**……本願を疑う者が自ら疑いの城に閉じこもり、浄土にありながらも仏の光明に接することができない。
- **胎宮**……母胎の中に入ったまま往生し、一定期間外に出られない。

ということになりますが、いずれにしても阿弥陀如来の大いなる願いを受けとめきれず、本源への疑いの心が残っている者が生まれる「仮の浄土」ということです。

親鸞聖人は、本願を疑い、仮の浄土にとどまることを憂いて次のように和讃をあらわされています。

仏智の不思議をうたがひて
自力の称念このむゆゑ
辺地懈慢にとどまりて
仏恩報ずるこころなし

罪福信ずる行者は
仏智の不思議をうたがひて
疑城胎宮にとどまれば
三宝にはなれたてまつる

自力諸善のひとはみな
仏智の不思議をうたがへば
自業自得の道理にて
七宝の獄にぞいりにける

自力の心をむねとして
不思議の仏智をたのまねば
胎宮にうまれて五百歳
三宝の慈悲にはなれたり

（『正像末和讃』誡疑讃）

◆「果遂」の誓いという意味◆

前回紹介しましたが、親鸞聖人は、ご自身の長い求道遍歴の過程（回心の体験）を、阿弥陀如来の本願の内容に重ねて記しておられます。それは第十九願仮門（要門）の道より第二十願真門の道に回入（えにゅう）し、さらにまた、第二十願真門の道より第十八願本願（弘願 ぐがん）の道に転入（てんにゅう）したという記録であり、またすでに転入し開発（かいほつ）した真実信心を、念々に相続していることをも表していて、古来これを「三願転入」の文と呼んでいます。

ここをもつて愚禿釈の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勧化によりて、久しく万行諸善の仮門を出でて、永く双樹林下の往生を離る。善本徳本の真門に回入して、ひとへに難思往生の心を発しき。しかるに、いまことに方便の真門を出でて、選択の願海に転入せり。すみやかに難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲す。果遂の誓まことに由あるかな。ここに久しく願海に入りて、深く仏恩を知れり。至徳を報謝せんがために、真宗の簡要を摭うて、恒常に不可思議の徳海を称念す。いよいよこれを喜愛し、ことにこれを頂戴するなり。

（三願転入―『教行証文類』「化身土巻」（本））

この第十九願仮門の道とは、『観無量寿経』に教説されるところの諸行往生の道をいい、「要門」と示されます。これは浄土往生を目標とする行道でありながらも、その修習する行業がさざまな種類の行、すなわち雑行であるため、その善根や価値が多様に分裂してしまって、仏道としては不徹底になり、まことの行道は成立しがたいといえます。

しかし、この要門の行道における諸種の行業の中には、凡夫にとってもっともふさわしい行業として、第十八願に誓われている称名念仏行が含まれています。それはやがて真実の本願念仏の道に帰入するという可能性をも有していることでもあります。浄土願生の思いが徹底されていくなら、必然的にその者に宗教的決断をもたらし、凡夫に相応する称名念仏の一行を選択することになっていくはずです。そこで親鸞聖人は、ここにも如来の大悲の意趣を見てとり、それは根源的には、「悲願」（化身土巻）にもとづくものであると示されました。すなわち、第十九願・仮令の誓とは、十方の衆生をひとしく救済せんがために発願されたものなのです。

また第二十願真門の道とは、『阿弥陀経』に教説されるところの自力念仏往生の道をいい、これはひとえに称名念仏を積習して浄土に往生せんと願求する道です。第十九願諸行往生の道に比べて、称名念仏の一行を選びとって修習する行道ですから、本来的にはその称名念仏を基軸として、世俗的価値の本質的な相対化が成立し、それによって出世的世界への跳躍、転入が可能となるはずです。

しかし、この第二十願真門の道は、ひとえに称名念仏一行を選びとって専修する道でありながら、なおもそこに自執、自力の心が残存していて、自己自身についての根源的な崩壊、捨棄が成り立っていません。したがってまた、究竟的な真実の現成は成立しがたく、いまだ真実の道とはいいえないものです。つまり、すでに教法、行道は、真実の教法を学び、真実の行道を修しながらも、自執の心、自己計量の心が残存しているという、行者の主体の側に問題があるのです。

とはいいながらも、すでにその行道は、選びに基づく専修なる称名念仏一行の道なのですから、それはすでに表層的には、まことの行道にきわめて近似しているといえます。親鸞聖人が、この道を、ことさらに「真門」、真実の方便門と呼ばれた所以です。聖人は、ここにもまた如来の大悲を感得し、その道はひとえに「悲願」（化身土巻）にもとづくものであると領解されたのです。この第二十願を「果遂の誓」（化身土巻）とも名づけていらっしゃいます。それは願文の「果遂せずば」の語によるものです。この果遂とは「ついにはたさむ」（『浄土三経文類』左訓）ということであり、「やがては必ず成就する」という意味をあらわしています。つまり、この第二十願真門の行道は、たとえ現在は不充分であるとしても、やがては必ずまことの仏道（第十八願・他力念仏・真実信心）を果し遂げ、ついにはまことの往生成仏の証果を成就することができるということを示すものなのです。

ゆえに親鸞聖人は

定散自力の称名は
果遂のちかひに帰してこそ
をしへざれども自然に
真如の門に転入する

（『浄土和讃』）

と述べられました。

それなのに、「化土に往生すれば、ついには地獄に落ちる」などと主張するのは、要門・第十九願、真門・第二十願が如来の「悲願」であるということ、すなわち阿弥陀如来の大悲の心をまったく知らない者の、浅はかで無責任な主張であるといわざるをえません。

最後に、親鸞聖人のご見解に大いなる導きとなったであろう、聖人の兄弟子・隆寛律師のご文を紹介しておきます。

たとひわれ仏を得たらんに、十方無量不可思議の諸仏世界の衆生の類、わが光明を蒙りてその身に触れんもの、身心柔軟にして念仏の行につきて、自力・他力ということあり。これは、極楽をねがひて、弥陀の名号をとなふる人の中に、自力のこころにて念仏する人あり。まづ自力のこころといふは、身にもわろきことをばせじ、口にもわろきことをばいはじ、心にもひがごとをばおもはじと、加様につつしみて念仏するものは、この念仏のちからにて、よろづのつみをのぞきうしなひて、極楽へかならずまゐるぞとおもひたる人をば、自力の行といふなり。

加様にわが身をつつしみととのへて、よからんとおもふはめでたけれども、まづ、世の人を見るに、いかにもいかにも、おもふさまにつつしみ得んことは、きはめてありがたきことなり。そのうえに、弥陀の本願をつやつやとしらざるとがのあるなり。されば、いみじくし得て往生する人も、まさしき本願の極楽にはまゐらず、わづかにそのほとりへまゐりて、そのところにて、本願にそむきたる罪をつくのひてのちに、まさしき極楽には生ずるなり。これを自力の念仏とは申すなり。

（隆寛『自力他力事』）

仏事のあれこれ

住職さん教えて！

今号のテーマ

浄土真宗のタブー

真宗門徒として心がけるべきこと その四

今号でも「今さら聞けない？仏事のあれこれ」を解説いたします。「浄土真宗のタブー」第4弾です。

本来仏教では、迷信・俗信・習俗に惑わされずに生きるため、それらを避けることを勧めています。なぜ迷信・俗信等を避けるのか？それは、お釈迦様がお説きになり、親鸞聖人があきらかにされた真実の教えが、浄土真宗にご縁のあるすべての人々に正しく伝わって欲しい、という願いにもとづくものです。今回もじっくりと読んでみて下さい。

浄土真宗では、「魂入れ」とか「お性根抜き」とは言いません。

浄土真宗の教えには、仏壇やご本尊などに魂が宿るという概念はありません。したがって、お仏壇・ご本尊を迎え入れた場合、他の宗派のように「開眼法要」・「魂入れ」とは言わず、「入仏法要（にゅうぶつほうよう）」（入仏慶讃法要）、もしくは「入仏式」と言います。

他宗派で用いる本尊に魂を入れるというような、入魂的意味合いはありません。浄土真宗で言う「入仏」とは「新たにご本尊さまを家にお迎えする」という意味です。

このご本尊こそが、最も大切なのです。末永くお詣りさせていただく礼拝の対象がご本尊であり、お仏壇はその大切なご本尊を安置するところにほかなりません。

お仏壇は高価で立派なものをもとめているのに、ご本尊はお仏壇と〝セット〟、つまり〝おまけ〟のように付いてきたもので満足するというのは、本末転倒といわなければなりません。

お仏壇に、とても古いご本尊（掛け軸）をかけてお詣りされているご門徒もおられます。ご先祖さまが、北海道に渡ってこられたとき、私のいのちの依りどころとして、なによりも大切に持ってこられたのが、このご本尊であったと思われます。

もちろんお仏壇が立派なことにしたことはありませんが、何十年、何百年も、実に多くの人が「掌を合わせてきた」ご本尊こそが最も大切なのだということを、あらためて知っていただきたいと思います。

またご本尊は、京都のご本山＝本願寺より下付されたものをお掛けいたしましょう。

お掛け軸でなくご木像（仏像）をご本尊にとお考えの場合は、住職にご相談下さい（阿弥陀さまの像といっても、いろいろな種類がありますので）。

新しく家にご本尊をお迎えするのは、とても喜ばしいことです、家族のそろう日に、住職を招いてお祝いのお詣りをするのが「入仏法要」ということです。

逆に、お仏壇を新調するため古くなったお仏壇を処分したり、お仏壇の大きさ（サイズ）が変わったため、ご本尊もそれに合わせた大きさの掛け軸と交換するという際も、浄土真宗には仏壇や本尊に魂が宿るいうと考え方がありませんので、閉眼供養やお魂抜き、お性根抜きなどはいたしません。ですが、永年心の依り処として拝んでいたお仏壇や御本尊への感謝の気持ちから、最後のお礼のお勤めをさせていただくことは、門徒として大切な営みといえましょう。

真宗門徒は、お仏壇にお水やお茶を供えません。

一般的に浄土真宗以外の宗派では、仏壇にお茶やお水をお供えすることが多いようですが、浄土真宗ではお水やお茶を供えません。

それは、浄土真宗では、お仏壇が亡くなった方を安置する場所ではなく（ですから位牌は入れません）、私たちの生きる依りどころ・阿弥陀如来さまをご本尊としてを安置する場所であり、そのお飾り（荘厳といいます）は、阿弥陀さまのお浄土をあらわしているからです。

阿弥陀さまのお浄土には、生前につくった罪の報いでノドが渇き（飲もうとした水も火になってしまうと伝えられてきました）、水やお茶を欲する人（故人）はいないのです。

お浄土には「八功徳水」という有り難い水がふんだんにあると説かれていますので、のどが渇くことはありません（その「八功徳水」の象徴として、水をたたえた華瓶に樒（しきみ）を挿して飾ります。また生花を供えるための花瓶にも水をたたえます）。

また、阿弥陀さまの願いによってお浄土に生まれた者は、すぐに無量寿（永遠のいのち）をいただいて仏さまと成らせていただくのですから、罪の報いによってのどがカラカラで苦しんでいる者などおりません。したがって水やお茶を供える必要が無いのです。

水やお茶を供えてしまうと、故人は犯した罪の報いにより苦しんでいる＝救われておらず、仏さまにも成っていない、という意味になってしまい、「必ず救う」と誓われた阿弥陀さまや、その御約束によって仏さまに成られている故人に、とても失礼なことをしていることになってしまうので注意いたしましょう。

時々刻々

心の綺麗な人は、他の人々の心をも綺麗にする

～78歳の老人　2歳児を救う～

昨年夏、テレビ各局が連日こぞって報道していたことがありました。山口県周防大島（すおうおおしま）に両親とともにお盆の里帰りをしていた2歳の男の子が、散歩中行方不明になったという事件です。警察はもとより数百人体制で捜索に当たりましたが、2日たっても見つからず、男の子の安否が気遣われておりました。しかし捜索が始まって3日目、78歳のおじいさんが、朝から1人で捜索を開始し、ものの30分あまりで行方不明の男の子を見つけ出し救助した、という報道でした。

尾畠春夫さんというこのおじいさんは、生業の魚屋さんをやめたときから、「これからの残りの人生は社会に恩返しをさせてもらう」という信念で、震災が起こった地域などに、常に1人出向いてボランティアを行ってきた方でした。

2歳の子が未だ見つかっていない、と聞いて、いてもたってもいられず、数百キロ離れた九州の大分県から1人車を走らせ、周防大島にやってきて、これまでの経験・感を生かし、見事に1人の幼く尊い〝いのち〟を救ったのです。

しかも、心配していたご両親が歓喜・安堵し、尾畠さんに感謝したのは申すまでも無いことですが、この尾畠さん、一切謝礼を受け取らない。捜索後は汗まみれだったのですが、シャワーも遠慮する。「水道の水一杯位はいただくけど、それ以上は一切受け取りません」「ただ、私は困っている人の役に立ちたい、それだけなのです」と。尾畠さんは、このような信念をお持ちの方です。

その報道を見て感動し、涙した方も多いと聞きました。「己を恥じた」、という表現もずいぶん聞かれたように思います。若い世代の方々も「スーパーおじいさん」に心あらわれた方も多いようです。

心を綺麗にするということ

このような方を、心の綺麗な方というのでしょう。だからこそ、他の人々の心をも綺麗にすることができる。そう思いました。

仏教の教えも

諸悪莫作（しょあくまくさ）
衆善奉行（しゅうぜんぶぎょう）
自浄其意（じじょうごい）
是諸仏教（ぜしょぶっきょう）

といわれるように、一人ひとりが心を浄化する、綺麗にしていくことを目的として説いています。仏さまの教え・願いを聞いていたら、私が都合のいい時にお願いごとをするより先に、仏さまの方から私が願われていた。すなわち自分の都合でしかモノを見ない、考えない、けっして心の綺麗でない私（自分の心は綺麗だと勘違いしている人を含めて）をご心配下さって、少しずつでも心が綺麗になるようにと願い、働いて下さっている、そのことに気づいていくのです。

自己中心的な私であることから一生逃れることのできない私だけれど、自己中心的な私であることに気づかされながら、「少しでも私のできることをやらせていただこう」という願いに生きる身に育て上げられていくのです。

仏教では「布施」を大切な徳目として説きます。布施は、お寺さんに金品を差し上げることだけをいうのではありません。「無償の行為」つまり「見返りを求めないで、〝させていただく〟」行為こそ、仏教で説く「布施」なのです。

モノやお金でなくても、布施はできるのです。

相手の方の心情が癒やされることは、ときに相手の方を救うことにも繋がります。何でもお金に換算する世の中ですが、「お金云々ではなくて、もっと大切なものがある」という人情と気骨に満ちた人になれたら…。尾畠さんの報道から、そのような思いを強くいただきました。（住職記）

KOSHINJI CAFE

光心寺カフェ

和光会「僧侶カフェ」

昨年、和光会は仏教婦人会と合併し、和光会員はそのまま当寺の仏婦会員となりました。でも仏婦の行事とは別に、和光会所属の皆さん独自の集まりもあります。

この度は、第1回「和光会　僧侶カフェ」と銘打って、ケーキとコーヒー・紅茶で茶話会？……いえいえ、住職とお茶を飲みながら気軽になんでも話そう！という企画でした。

十勝毎日新聞や『CHAI』『しゅん』などの情報誌に時々載ってますが、帯広で数ヶ月に一度「僧侶カフェとかち」が開催されています（インターネットで「僧侶カフェとかち」と入力し検索してください）。超宗派の有志仏教僧侶がメンバーとなって、街中の喫茶店を会場に行っているのですが、毎回満席（7時以降は予約制で、毎回早い段階で埋まります）になるほど好評を博しています。当寺住職もそのメンバーの1人として活躍（？）しており、なかなか街中まで出かける機会のない（？）和光会の皆さんから「僧侶カフェをお寺でやって欲しい！」という要望があり、このたび第1回目を開催し、楽しい時間を過ごしました。

日頃じっくり聞くことのできないことも、この機会に聞けたのでよかった、という感想をいただきました。

▲ 街中の喫茶店で行っている「僧侶カフェとかち」の様子。次回は7月15日の予定です。

7ページ シルバー川柳クイズの答え

1　（徘徊）と噂をされて散歩止め
2　（年賀状）書かねばあの世とうわさされ
3　どこで見る（東京五輪）天か地か
4　朝起きて調子いいから（医者）に行く
5　万歩計半分以上（探し物）
6　私だけ（伴侶）がいると妻嘆く
7　こんにちは思い出せずに（さようなら）
8　（ひ孫の名）読めない書けない聞きとれない
9　（白内障）術後びっくりシミとシワ
10　この（動悸）昔は恋で今病

門徒総会

今年度の光心寺門徒定期総会は、1月の最終日曜日・27日に開催されました。豊西町の村瀬正敏さんを議長に選出し、議事の進行をしていただきました。昨年度の行事報告・収支決算、本年度の行事予定・収支予算等、すべての議案が承認されました。

令和元年度　世話人の皆さま

いつもお世話になります。有り難うございます。

帯広市愛国町　中山　賢寿様
帯広市愛国町　山口　強様
帯広市大正町　福島　将文様
帯広市大正町　野嶽　忠昭様
帯広市大正本町　国島　直幸様
帯広市大正本町　松島　勝己様
帯広市昭和町　大岡　克則様
帯広市昭和町　木下　武美様
帯広市昭和町　宮浦　賢二様
帯広市幸福町　飯田　昌博様
帯広市幸福町　山田　利幸様
帯広市中島町　松本　竹夫様
帯広市泉町　深田　義昭様
帯広市以平町　山田　俊幸様
帯広市桜木町　田中竜太郎様
帯広市桜木町　辻　賢治様
帯広市桜木町　鈴木　芳一様
帯広市川西町　尾関　卓一様
帯広市川西町　森　喜啓様
帯広市川西町　庄島　彰様
帯広市豊西町　高田　勝則様
帯広市基松町　高田富士子様
帯広市上清川町　五十嵐　守様

帯広市大空町　古田　稔様
幕別町古舞　松田　育禮様
幕別町古舞　佐伯　勝江様
幕別町古舞　速水　隆啓様
幕別町　栄　土井　義則様
幕別町美川　山崎　巌様
幕別町途別　一原　康男様
幕別町五位　粟野　実様
幕別町札内　若山　修様
幕別町札内　川原　利弘様
幕別町札内　守護　康伸様
幕別町札内　廣川　克美様
更別村更別　田中　愛規様
更別村勢雄　平光　徹男様
中札内村大通り　窪田　義正様
広尾町丸山通り　常富　彰仁様
芽室町東5条　中田　正一様
芽室町西士狩　佐伯登貴子様
音更町駒場　山田　邦夫様
音更町新通　小田　安雄様
音更町共栄台　石田　為雄様
帯広市街　勝見　恒徳様
帯広市街　小森　正伸様

帯広市街　川口　博様
帯広市街　林　昭一様
帯広市街　井上　晃一様
帯広市街　林　延光様
帯広市街　鈴木　忠実様
帯広市街　平田　裕子様
帯広市街　古田　敦則様
帯広市街　田中　繁様
帯広市街　香田　究様
帯広市街　納村　昌克様
帯広市街　中田　努様
帯広市街　久保　直栄様
帯広市街　黒田　好恵様
帯広市街　大岡　裕子様
帯広市街　横山　幸様
帯広市街　馬渕美津夫様
帯広市街　石澤　健一様
帯広市街　池田　愛子様
帯広市街　加賀　文明様
帯広市街　水野　実様
帯広市街　高田　義広様
鹿追町　古後美枝子様

世話人が変わられる場合は、必ずその担当地区内で次の方をお選びいただき、お寺の方に連絡願います。

お寺をささえるご門徒のみなさん

境内冬支度 11月19日

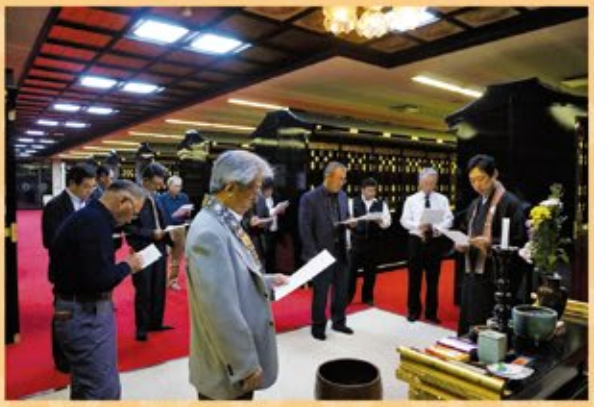
親光会・総代・役員の皆さまに境内の冬支度をしていただきました。

総代会 12月8日

当寺の永代納骨をどうしていくべきか、新たな施設を見学しながらご検討いただきました。

門徒総会 1月27日

当日は、婦人会・和光会の役員さんにもお手伝いいただいています。



浄土真宗のお寺は、ご門徒の皆さまによって成り立っています。このコーナーでは、お寺を支えてくださる皆さまの様子をスナップしてみました。

年末のお餅つきと大掃除 12月21日

婦人会・親光会・総代・事務局の皆さまに、新年を迎える準備をしていただきました。

厨房大掃除 12月21日

和光会の皆さまによって厨房の大掃除をしていただきました。

除夜会・元旦会 12月31日～1月1日

総代・事務局の皆さまに、寒い中「除夜の鐘」のお手伝いをいただきました。

PHOTO ALBUM 2019

御正忌報恩講・仏婦報恩講
新年会
2019年1月21日

十勝組総代会・壮年会合同
一泊研修会
於 観月苑　2019年2月12日～13日

園児訪問
2019年3月19日、木野南保育園（大谷菩提樹会）の年長組の皆さんが、卒園旅行で光心寺を訪問してくれました。

雪の少ない冬でしたが、12月13日の朝、境内はこんな景色でした。

編集後記

＊「光心寺だより」第二十六号を、報恩講法要の案内発送にあわせて発行いたしました。今年も帯広十勝では、10連休の間に桜が満開となりました。境内の桜も連休中は満開でした。初めての10連休でしたが、この間に時代は平成から令和へと移行しました。仏教の心がもっと広く世に伝わり、心豊かで平和な時代となることを願わずにおれません。

＊今年の報恩講のご講師は、3年ぶりに谷川弘顕先生にご出向いただきます。布教伝道の第一人者でいらっしゃる先生のお話は、ほとんど初めてご法話を聞いた、という方々にも「聞かせていただいてよかった」と好評です。この度も先生のお話を楽しみにされている方が多いことと思います。どうぞお誘い合わせの上、光心寺門徒以外の方にもお知らせいただき、お詣りにお越しください。心よりお待ちしています。

＊今年の冬は例年になく雪が少なかったため、「歩きやすい」「車で走ってても安全」「除雪が少なくて助かった」など、良い面もあったのですが、やはりそれなりに雪が降らないと困ることもあるのは確かです。物事を一面的に私の都合で見て「良い」「悪い」と決めつけないことの大切さを、仏法から知らされたことでありました。

（住職記）

光心寺だより　第２６号
２０１９年（令和元年）６月１日発行
発　行　浄土真宗本願寺派 十勝山 光心寺
〒089-1242 北海道帯広市大正町基線60番地
発行人　桃井信之

Design & Printing／P's noncategory.inc